

ユネスコ・クラフト創造都市 — 手仕事のまち・金沢

金沢の伝統工芸

金沢の伝統工芸は、加賀藩主前田家による工芸振興を抜きには語れず、歴代藩主が京都や江戸から名工を招聘し、これに加賀伝来の素材や技術が相まって、武家文化の豪華さと繊細さをあわせもつ独自のデザインが確立されました。

藩政期から420年以上にわたって、大きな災害や戦禍に遭わず、歴代藩主が進めた文化政策によって、町衆にまで茶の湯や謡が浸透した金沢では、今も、数多くの伝統工芸が、人々の暮らしの中に息づいています。

金沢箔 (かなざわはく)

その歴史は、安土桃山時代に遡りますが、明治以降、技術の高さや水質の良さから急速に発展しました。現在、全国生産高のうち、金箔は99%以上、銀箔・洋箔は100%が金沢産です。

深みのある輝きと劣化しない特性を活かし、美術工芸品の加飾、歴史的建造物の修復のほか、近年は、インテリア等への応用も試みられています。

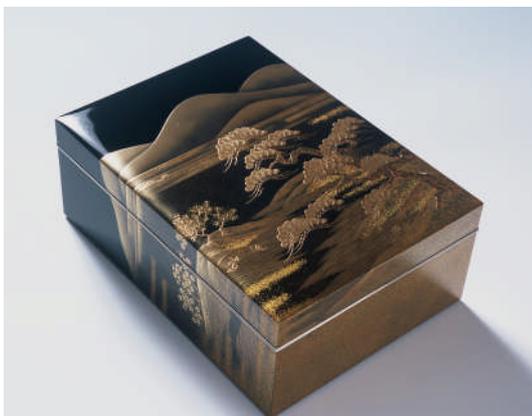


金沢漆器 (かなざわしっき)

三代藩主利常が、京都から蒔絵の名門・五十嵐家の道甫を招いたことに始まり、貴族文化の優美さに武家文化の力強さが加わった独自の漆芸が確立されました。

多彩な技法が、加賀藩の職人工房である御細工所で培われ、町方にも伝播し、今日まで、受け継がれています。

金沢漆器は、大量生産ではない、茶道具などの一品制作を特徴としています。





加賀友禅 (かがゆうぜん)

加賀独特の梅の木を材料とした染織等が源流となり、18世紀前半、宮崎友禅斎により基礎が築かれました。狩野派の流れを汲み、草花を中心とした写実的な絵画調の絵柄は、京友禅の文様的な画風とは対照的です。

落款制による作家の一貫生産システムを確立し、近年は、加賀友禅の技法を応用したドレス等も開発されています。

金沢九谷焼 (かなざわくたにやき)

十一代藩主斉広の時、京都から名工青木木米を招聘し、1807年卯辰山に春日山窯が開かれ、その後、加賀藩土による民山窯に引き継がれました。

金沢九谷は、細密画と盛絵具、独特の赤を特徴としており、細やかな筆遣いは、豪華な気品と風格を感じさせます。

近年では、脚と台に九谷を用いたワイングラスなども開発されています。



加賀繡 (かがぬい)

室町時代、仏前の打敷や袷裯の装飾技法として伝わりました。藩政期には、藩主の陣羽織や奥方の着物などに用いられ、さらに、友禅の染模様を際立たせるためのより高度な技法が発達しました。

絹糸、金糸、銀糸を巧みに使い、繊細な技術で一針一針丹精に、立体感のある図柄を浮かび上がらせるところが特徴で、日常雑貨などにも活かされています。





金沢仏壇 (かなざわぶつだん)

浄土真宗が人々の生活に深く根をおろす金沢における仏壇の需要に応えたのが、御細工所に集った名工の流れを汲む職人たちです。

木地師、塗師、蒔絵師、彫刻師、金具師などのあらゆる工芸技法が駆使され、金箔もふんだんに用いられています。

荘厳華麗な金沢仏壇は、金沢の伝統工芸の集大成とも言えます。

加賀象嵌 (かがぞうがん)

象嵌は、刀装具などに用いられる武家に必需の金属加飾法で、二代藩主利長が導入を図り、高度な発展を遂げました。

特に、加賀象嵌の鐙は、いかなる衝撃にも剥がれず、精巧で優美な意匠とあいまって、天下の名声を博しました。

さらに、美術工芸品としても世界的に評価されて、優れた作品が各国の美術館に収蔵されています。



大樋焼 (おおひやき)

五代藩主綱紀が京都から招いた茶道裏千家四代・千宗室・仙叟に伴った、楽家四代・一入の高弟、初代土師長左衛門が伝えた楽焼が大樋焼の始まりです。

ロクロを用いずに手捻りによる造形、釉薬が溶けているときに窯から引き出す独特の焼成と、京都楽焼の黒焼とも赤焼とも異なり、茶の鮮やかな緑を引き立てる飴色の釉薬が最大の特色です。

その他の主な伝統工芸

加賀毛針

加賀藩で武士の内職として作られた鮎釣り専用の針で、野鳥の羽毛に金箔が施されています。



竹工芸

御細工所の竹工が始祖で、茶道具や華道隆盛とともに芸術的な竹工芸の技術が発展しました。



茶の湯釜

五代藩主に仕えた宮崎彦九郎の子・義一が始祖で、一貫工程によるきめの粗い肌が特徴です。



加賀提灯

16世紀後半から松明代わりに作られ、竹骨を一本一本輪にして留めて、丈夫なことが特徴です。



銅鑼

人間国宝である故初代魚住為楽によりその製法が見出され、代々継承されています。



金沢桐工芸

良質の桐材とロクロ木地師の技、加賀蒔絵の伝統を基礎に表面を焼いて磨いた焼肌が特徴です。



二俣和紙

献上紙漉き場として藩の特別な庇護を受け、加賀奉書など高級な公用紙が漉かれました。



郷土玩具

三代藩主利常が人形師に作らせたのが始まりといわれ、武士の手内職として受け継がれました。



金沢和傘

藩政期から明治・大正と盛んに作られ、張り込み紙に楮紙を用いて、丈夫なことが特徴です。



加賀竿

漆塗りや加飾が施され、優美さと堅牢さが特徴で、釣竿の最高級品といわれます。



三弦

藩政期からの芝居そして東、西、主計町の花柳界を中心に発展し、音色を重視してきました。



琴

蒔絵や螺鈿をふんだんに使った雅なものも多く、楽器の域を超えて芸術品のような趣が特徴です。



加賀水引

加賀藩では実用品よりも装飾品として用いられ、現在でも水引の技術は進歩しています。



金沢表具

藩政期に御用表具師の記録があり、文化財の修復にも活かされる高度な技術が特徴です。

